家族との生活、神聖な生活

ヴァニ・ダールグレン

1976 年、バーバ・ムクターナンダがインドに戻る少し前に、夫と私はニューヨークで彼からシャクティパートを受け取りました。私たちは、バーバの愛と恩恵の体験にとても感動し、バーバともっと時間を過ごしたいと切に思いました。そしてついに 1978 年の春、グルデーヴ・シッダ・ピートゥでバーバと一緒にいるために、インドへの旅行を計画できたのです。

ボストン近郊のわが家からインドまでの旅は 30 時間かかるので、2人の幼い子たちには大変過ぎると思いました。そこで、私が2週間行き、その間は夫が子どもの世話をし、私が家に戻ったら夫がインドに行くことにしました。

私は、5月の満月、バーバの誕生日の直前にグルデーヴ・シッダ・ピートゥに到着しました。そしてこの上ない喜びと共に、中庭でのバーバのダルシャンへ行きました。私は、夫と私が子どもの世話を分担していること、そして私が家に戻った後に夫が来ることをバーバに伝えました。

バーバはすぐに、「あなたは子どもたちを連れて来るべきだった」と言いました。これを聞いた時、私のマインドが一瞬止まりました。そして唯一思い浮かんで口に出た言葉は、「バーバ、次回は」でした。バーバは、「次回では、彼らはとても年を取ってしまっているだろう」と答え、そして中庭に座っている幸せで健康そうな子どもたちを指さしました。

私は中庭に座り、バーバが言ったことを考え始めました。家族全員が一緒にアーシュラムにいることをバーバが望んでいるのは明らかでした。私は、どうしたら子どもたちがインドに来ることができるか考え始めました。当時、ガネーシュプリーから米国に電話をかける方法はありませ

んでした。しかし、アーシュラムの通りの向かい側に、米国にメッセージを送ることができる電報局事務所がありました。その事務所には、レバー付きの旧式の通信機器があり、交換手がモールス信号でメッセージを打つのです。電報が海外に届くには何日もかかりましたが、うまくいくことを願い、私は電報で夫に子どもたちを連れて来ることができるか尋ねました。

返信は受け取りませんでしたが、何が起ころうとも、グルデーヴ・シッダ・ピートゥでの時間をできる限り有意義に使おうと決め、アーシュラムの日課を熱意をもって始めました。毎日午前3時に起床し、瞑想して、すべてのプログラムやチャンティングに参加し、そして多くの時間をセーヴァーにささげました。みなぎる喜びと共にどっぷりと浸りました。それでも時々、私はバーバが提案したように、家族全員がその体験の中にいないことに、居心地の悪さを感じました。

そして、私が帰る予定日の数日前の早朝、「シュリー・グル・ギーター」の朗唱が終わろうとしているちょうどその時、夫と子どもたちが中庭に入ってきたのです！ 私は自分の目が信じられませんでした！ 私は家族を見てびっくりし、嬉しくて胸がはち切れそうになりました。彼らは私の電報を確かに受け取り、返信を送ったものの、それが着く前にアーシュラムに到着したのです！ 私は滞在を延長することができ、一緒にアーシュラムで数週間過ごすことができて、皆とても幸せでした。

家族が到着するとすぐに、私のスケジュールは変わりました。瞑想と幾つかのアーシュラムのイベントには参加しましたが、私は毎日子どもたちと至福に満ちた多くの時間を過ごしました。子どもたちは、アーシュラムにいて、バーバと座って、チャンティングの甘い響きを聞いて、庭にいる動物や彫像を訪れることが大好きでした。家族の誰にとっても、グルデーヴ・シッダ・ピートゥでバーバと一緒に過ごしたこの時間は、最も大切な思い出の一つです。

私たちは帰宅した後でも、バーバの存在と守られていることを感じ続けました。私たちの家はシャクティに満ちた神聖な場所のように感じられました。サーダナーをし、修行をし、互いを愛

するために、そしてそうすることで神とグルに近づくために、理想的な場所のように思えました。グルデーヴ・シッダ・ピートゥに家族一緒に来させることで、バーバは家庭生活を神聖な生活へと変容させました。なんと類まれなる恩恵なのでしょう！

© 2022 SYDA Foundation®. 著作権所有。